

草生栽培で土づくり10年

普及部 技術普及課

このコーナーでは、全国の自然農法に取り組む農家にスポットを当て、それぞれの自然農法について語っていただきます。

今回は、自然農法技術交流会関東会場の視察農家としてお世話になった神奈川県小田原市で自然農法を営む「なんくる農園」の松本邦裕さんをご紹介します。

松本さんが営農されている神奈川県小田原市は総世帯数に占める農家世帯数は2.9%ですが、農業は果樹や水稲栽培が中心で、特に「みかん」は、県内生産量の約4割を占めています。また、梅の加工品（梅干し）は「小田原の梅」として有名なところですよ。

松本さんは小田原市郊外で自然農法によるトマトやナスなどの果菜類をはじめ、少量多品目の宅配用野菜栽培と水稲や小麦、大豆といった作物の栽培も行っています。昨年、新規就農10年を迎え、ますます充実してきている松本さんですが、自然農

法を始めるまでには様々な苦労があったようです。

就農を志すきっかけと自然農法を志したきっかけを教えてください。

私が就農を志したのは、自身の体の変調を通してでした。

大学卒業後、一般の不動産会社に就職し、将来は独立をしていきたいと考えて会社勤めをしていました。いよいよ独立準備段階まで来たのですが、持病のぜんそくが悪化して、仕事を断念せざるを得なくなりました。

その後、しばらく自宅療養をしていましたが、なかなか回復しませんでした。そんなときに、父が自然農法に関わる仕事（当センター理事長（当時））をしていたので興味を持ち、「健康な体を作る根本は食べもので

あり、健康に良い野菜を自分でつくりたい。人から喜ばれるような、見て美味しい、触って美味しい、食べたら本当に美味しい野菜を作りたい」と考えるようになりました。

農業を志した後、どのように農業の勉強をされましたか。

農業への志は持ちましたが、まだ、ぜんそくが治っていなかったので、農業の勉強と療養を兼ねて沖縄で農業関係の仕事に従事しました。

2年が経過したところで、小田原に戻り、（財）自然農法国際研究開発センター千葉農場（当時）で約1年間の研修を受け、基本的な技術と知識を学びました。

研修後、農地を探して、就農するまでの経緯をお聞かせ下さい。

農地を見つけるのには苦労しました。空き農地を探しては地主さんを訪ねましたが、なかなか貸してもらえず、行政に相談しても相手にしてもらえず、諦めかけていました。

そんな時に、神奈川県新聞に地元で「新規就農した」という記事を見つけ訪ねてみました。その方から「あしがら農の会」の存在を聞き、会の活動に参加しているときに、地元の方から畑を借りることができ、念願の就農を果たしました。

「なんくる農園」の名前の由来について教えてください。

「なんくる農園」の名前は沖縄弁の「なんくるないさあ」（なんとかなるさ）からとりました。理由は、私が体調を崩してから、ここまでの間にいろいろな経験をさせていた



なんくる農園の小麦畑から富士を望む



収穫を待つ稲穂



研修時代に学んだ緑肥草生栽培を取り入れた畑

きました。どんなことがあっても最後はなんとかなるということを経験したので、それを農場の名前に入れたかったのです。もう一つが、就農後の目標として、自然農法の野菜が

気軽に手に入るように、少しでも多くの野菜が作れるように、また作り手が増えるように、焦らず、気張らず、でも足元はしっかりと固めながら、最後は「なんくるないさあ」の

精神でがんばるぞ、という意味で命名しました。

就農直後の出荷はどのようにしたのでしょうか。

最初の頃の出荷は農地を借りるときにお世話になった「農の会」の会員さんを通じた、野菜セットの宅配でした。就農当初は、借りたばかりで土もできていなかったし、栽培技術も未熟でしたので、いいものが収穫できませんでした。それでも、タネ代くらいは回収できればと思いますが、立派な野菜ではなかったのですが、

会員の方にご理解いただき、買って頂きました。

農業での生活はいつ頃安定したのでしょうか。

就農当初はそのような状態だったので、農業だけでは生活できませんでした。また、畑の面積も7aほどしかなかったので、穫れる量も限られていました。ですので、農業で生活できるようになるまでは、妻にパート勤めをしてもらって、生活していました。

その間、徐々に生産技術も向上



宅配用野菜セット



SUNDAY MARKET の出店風景



クロタラリアとセスバニアの緑肥混播



少量多品目で彩り鮮やかななんくる農園

し、土もできてきたので、生産量もだいぶ増えてきました。また、出荷先も、朝市の「SUNDAY MARKET」や小田原まちなか市場などへ出店して、出荷量が増えてきたので、農業で生活できるようになりました。今は夫婦二人で農作業に従事しています。

ちなみに、生活が安定しているかという点でも綱渡りで安定はしていません。(笑)

土ができてきたというお話しですが、松本さんの土づくりの方法についてお話し下さい。

なんくる農園の土づくりの基本は

緑肥の活用です。有機物の補充はもとより、病害虫の忌避効果、根による孔隙量の増加等々の効果を期待して活用しています。

自然農法・有機農法で多くの人が苦労しているのが、いかに良い有機物を効率的に補えるかだろうと思います。畑の特性、地域性、耕作者の好みでいろいろな方法が考えられると思っています。なんくる農園では緑肥の活用を基本に考えていますが、畑の状況により緑肥を活用しにくい畑もあり、また畑の状態・作物によって、時には畜産堆肥を活用することもあります。

有機物の大量投入による急激な地

力矯正では、健康な野菜は栽培できないと考えていますので、自然の力を活かした土づくりを行うようにしています。緑肥や畑作物と野菜を輪作しながら、また野菜栽培では緑肥草生栽培を取り入れた栽培を行い、土をつくりながら作物を作る、また圃場生態系を豊かにする作付け体系を心がけて栽培しています。

栽培上で気をつけていることは何でしょう。

旬の野菜を一年中お届けするため、品種や栽培法を工夫して、できるだけ作期を広げ長期間収穫できる栽培を行うようにしています。

また、1回の作付け面積を少なくして、圃場の中は常に多品目の野菜を作付けるように栽培し、前の作物を収穫したら、すぐに次の作物が収穫できるというような、連続栽培をできるだけ取り入れています。そうすることで、作物同士が助け合い、共生の関係ができ、病害虫抑制に繋がっていくと考えています。

栽培上の課題などはありますか。

先ほどお話ししたように、緑肥の活用はとても大事といえながら、ここ数年間は緑肥の作付け量が激減していました。というのは、野菜の注文量が多くなり、緑肥を栽培する余



なんくる農園を視察会場に自然農法技術交流会（2012 関東会場）を開催しました

裕がなくなってきたからです。このままではいけないと思い、昨年は春から夏にかけてクロタリアやソルゴーをあちこちの畑に播きました。その結果、土を作ることはもちろんですが、それ以外にも別の効果をもたらしました。ほとんどの畑に緑肥を作付けたので、畑による緑肥の育ち方の違いから、土のでき具合が分かるようになりました。以前は野菜のでき具合で、何となく変えていた栽培を土の状態を確認して作付けに活かすことができました。

自然農法のこだわりをお聞かせ下さい。

就農前から考えていたことです。

が、自分が作る野菜は人から喜ばれるような「見て美味しい、触って美味しい、食べたら本当に美味しい野菜を作ること」を目標に栽培しています。消費者の声を聞ける関係でありたいと思っていますので、自分で届けられる範囲は直接配達して消費者の声を聞くようにしています。

最近では出荷先が増え、野菜の出荷量も増えつつあります。出荷先が増えれば出荷・販売に要する時間も増え、出荷量も増やさなければなりません。そうなったときに生産にかかる時間をどれだけ確保できるか、生産と販売のバランスを大事にして、生産物の品質と量を落とさないようにしなければならぬと考えています。

自然農法を始めて良かったこと、自然農法の魅力を教えてください。

先にも述べましたが、就農のきっかけは大病をしたことです。そんな体で農業などできるはずがないとも言われましたが、ここ数年ぜんそくの発作が出ることもなくなるほど健康な体になりました。

自分で育てた安心、安全で新鮮な野菜やお米を家族みんなで食べられ

る生活ができてきました。自然農法農家の一番の魅力かもしれません。9か所あるすべての畑から富士山が望めます。農業を始めるまでは富士山を美しく感じる余裕もありませんでした。今では富士山を眺めながら農作業のできる日々に感謝しながら、草花の四季折々の変化、虫や鳥の声を楽しんでいきます。自然農法Ⅱ自然観察。普段何気なく自然を感じることができる喜びでいっぱいです。もちろん日々の農作業は大変なことが多いのですが（笑）

最後に将来の目標・抱負をお願いします。

名前の由来のところでもお話ししたように、どこでもいつでも自然農法の野菜が買えるような社会になればいいと思っています。

そのためには農業者と飲食店（流通業者）と消費者が収穫体験や収穫祭などのイベントを通じて、お互いの立場を理解し合える関係を作っていききたいですね。

私が財団旧千葉農場で草生栽培のモデル展示をしている頃、松本さんが研修にられました。非常に勉強

熱心で農家になるための熱い思いを感じましたが、その頃は時折ぜんそくを発症して、農家になるのが心配なほどでした。

農家となられてからも、緑肥を活かした土づくりを継続して行い、畑も農業を始めた頃とは見違えるようになりました。それに伴い体も農家らしいがっしりした体格になり、ぜんそくも克服されたようです。

松本さんの「人から喜ばれるような、見て美味しい、触って美味しい、食べたら本当に美味しい野菜」が地域に広がっていくことに少しでもお手伝いできるよう、当センターも協力していきたいと思っています。

（石河 信吾）

なんくる農園 松本 邦裕



NPO法人あしがら農
の会 理事、NPO法人
おだわら農人めだかの
郷 理事、小田原有機の
郷づくり協議会 理事
ブログ「なんくる農園の畑人日記」
(<http://nankuru831.cocolog-nifty.com/blog/>)
現代農業 2012 年 3 月号（農文協）、自然農法 60 号、自然農法技術交流会 2012 資料集